Vol.．257　「今、話題の人見の妙見様」　（平成25年6月10日）

ここ数カ月前頃から巷間に人見神社、妙見様の話題をよく耳にするようになりました。

その昔、徳川家光が品川御殿山から望遠鏡で安房、上総を眺められた時、江戸の海に獅子頭の様に突出している山を見て、人見妙見山を別称して獅子頭山とも呼ぶようになったとの言い伝えがあります。　宮崎宮司のお話によれば、人見神社は平将門の乱の後、平忠頼が上総介に任せられた折り、尊崇する妙見大菩薩を鎌倉から人見山頂へ移し祀ったと言われおり、人見山は近世の江戸湾を航行する船、漁師たちの海の目印「ヤマ」として厚く信仰されてきました。また山頂から一眺する近隣旧１７ヶ村の郷社、総鎮守して毎年２月２２日は１７ヶ村の氏子代表が集まり、春の例大祭が行われております。諸説ありますが将門と行動を共にした良文の孫忠常も南関東を収めて、また反乱を起こし源頼信に平定されたが、相馬郡一帯の所領は残されて妙見大菩薩を守護神として千葉氏嫡家となり、千葉一族の関係所領、千葉、印西、飯高、横田、細田、仁見の上総、下総の両総六妙見を祭祀して千葉一族結合の守護神として今日に至っております。明治の文豪大町桂月が鹿野山大塚家に逗留して「鹿野山は下から見上げる山ではなく、山頂から関東一円を眺望できる関東一の名山である」と書いてあったと記憶がありますが、妙見山も標高わずか６７メートルですが、山頂付近の鬱蒼とした樹木を切り払ってから眺望が一変致し、私もここ数年四季折々絵を描く仲間、写真家の友人たちと参詣致しておりますが、鳥居操さん曰く、今の表参道は、かつて若き浜幸先生が元旦早朝さらしを巻いて駆け上がった３２３段の石坂は、中々健脚でないと上がれない至難な坂となりました。･･･と、大鳥居をくぐってすぐ右へ入ると昔の表参道があります。私も一寸のぞいてみましたが妙見古道？とも言いたい古い風物が残った古道となっています。車ですと旧１６号、神門市街地に係る歩道橋の下を南に上がると頂上まで車で行けます。

守廣司さんが山頂から見る「北側」の眼下には君津製鐵所があり、アクアラインさらには冬晴れの日などは筑波山も見えます。「東側」は君津市街地の見事な鳥瞰図を見るようであります。上総丘陵から昇る初日の出は街全体を黄金色に輝かせて、見る人たちに歓声を上げさせます。「南側」は１７ヶ村の豊かな田園が広がり、三船、鹿野、鋸山の連山が起伏して東京湾口が大きく広がり出入りする船すべてが視界に入って来ます。晴れた日には大島も水平線上に浮かんで見えます。東京湾観音が白く聳え立つ姿も印象的です。特に西側は１月から２月にかけては東京湾を真っ赤に染めて、沈む落日は三浦半島、伊豆、箱根の山々を濃い紫に、富士山を朱色に彩りを変えて行く姿は絶景であります。是非ご覧ください。　この季節はカメラを持った人が多くなり、プロの相川氏も良く来られております。この山頂の四季の風物は春は吉野桜、夏は海からの涼風に吹かれて見る東京湾の夜景であります。海ほたるが乱れ飛ぶような船の灯り、色鮮やかな大観覧車、それに山頂は暗いので星が良く見える事です。秋のアカシヤの黄葉、かえでのうるしの紅葉も美観であります。帰りに立ち寄った神社前の旭屋の親父さんに「俺の店はここでもう１５０年も頑張ってるぞ！会頭地元がもっと良くなるように頑張ってくれよ！」と発破をかけられました。　人見、神門、大和田地区は次の世代の繁栄を願って先祖伝来の漁業権を放棄した近代君津市中興の地域であります。先人たちの願いに報い応えるためにもこの地区の繁栄をと妙見様に願ってこの稿を終わりますが、是非一度妙見山に登って展望されて下さい。